
よこしるどれん

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よこしるどれん

【Nコード】

N3225X

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

オリジナル設定満載のGSとチルドレンのクロスです。アシュの後で精神的にへこたれた横島が、妙神山から帰ってきたところから始まります。潜在ヒロインは「シホ」と、結構無いパターンかと思っ
ていますが、手垢の付いた題材でもあります。いつもどおり誤字脱字満載ですが、お付き合いの程を。※一気に気持ち盛り上がったところまで書きましたので、アップします。

第一話 少女は出会った（前書き）

主役 .. 横島忠夫

ヒロイン .. シホ

そんな二人がであつた話しから始まります。

第一話 少女は出会った

第一話 少女は出会った

サイド 少年 T・Y

何度も死んだ修行も、どうにかこうにか越えぬいた。
無力と絶望って奴のせいで死にかかっていた俺を救ってくれたのは、やはり仲間だった。

ツンデレ上司、ほんわか同僚、馬鹿弟子、悪友達。
そして神魔の友。

はつきり言えば過保護すぎだが、それでも俺が前を向くことが出来るようになったのはみんなのおかげ。

だから俺はみんなに恩返しがしたいと思っている。

出来ることから、小さな事からコツコツと、出来ることを精一杯。

そんな気持ちとともに美神さんの事務所に顔を出すと、美神さんどころか、うちの事務所衆、冥子ちゃん、エミさん、ピート、タイガー、雪之丞、神父・・・みんなが待っていてくれた。

「遅かったじゃねえか！」

軽いジャブで迎えてくれた雪之丞の拳を軽く受けると、驚いた顔になった。

「おめえ、さらに強くなりやがったな」

「・・・あんな修行場にまるまる二月もいれば、誰だって、な」

苦笑いの俺をみんなが歓迎してくれた。

「横島君、お帰りなさい」

「・・・ただいま帰りました、美神さん」

ぺこりと頭を下げると、優しく撫でてくれたのが嬉しくて、思わず泣いてしまった。

「で、けりは付いたの？」

「・・・あいつのことは、ルシオラのことは終わらせません。生涯共に歩く相手です。でも、それを容認してくれる相手がいれば、少しだけ心を動かそうと思います」

「ふ、ずいぶん女々しい結論ね？」

「それが俺っすから」

辛辣な台詞だけど、美神さんが俺を思ってくれているのはわかる。だから、俺も素直な気持ちで返すことが出来た。

「お帰りなさい、横島さん」

「せんせい、せんせー！ー！ー！」

大泣きのシロ、ぼろぼろ涙のおキヌちゃん。

みんなが帰還を祝ってくれた。

だから、うん、一応、俺は言う。

「ただいま横島忠夫は戻って参りました。これからもよろしく願います！ー！」

わっと拍手が盛り上がり、おれはその暖かさに包まれていた。

サイド 少女 S・S

「シホ、なんか具合悪いのかあ？」

「なんか、こう、ぼーっとしとる」

不意に親友二人が視界に入った。

どうやら私は思いに耽っていたようだ。

「あ、大丈夫よ、薫ちゃん葵ちゃん」

「まあ、女の体だし、色々あるんだろうけどなあ」「ややわ、もしかして抜け駆け!？」「く、くそお、女の体を手に入れたのかあ!？」

「そんな分けないでしょ、もう」

二人の妄想のような成長はなかったけど、迷子の最中に会った彼への思いは、もしかすると「女の体」を手に入れたようなモノだったのかもしれない。

出会ったのは偶然。

任務の後で、一人はぐれてしまった後のことだった。

某指揮官の精神を崩壊させてやったあと、葵ちゃんと薫ちゃんに

後始末を頼んだのが悪かった。

私一人現場に取り残されてしまい、どうやって帰ったものかと頭をひねることになってしまった。

本来なら電話の一つでも、となるんだけど、全部葵ちゃんのポーチに入っているの、どうしようもなかった。

では、ふつうに公共機関に助けを呼べるかと言えば、そういうわけにはいかない。

何しろ私たちが所属しているBABELは、思いの外官僚受けが悪いので、警察官にでも相談すれば大騒ぎになってしまう。

どうしよう、そう思っているところで出会ったのが彼だった。

「・・・お嬢さん。どうしたん？ 何か困ってるんか？」

きたな、幼女好きの大きなお友達！

そう思っ振返ったら、全く違っていた。

接触しなくても読めるほどの善意であふれていたから。

「・・・迷子」

とりあえず、害のない子供のふりをしてみると、彼は私の目線までしゃがみ込んでのぞき込んだ。

「んー、警戒するのはわかるが、一応、俺も人を見る目があるつもりや。せやから、無理せんでいいぞ？」

彼は自分の懐から一冊の何かを出した。

そこには免許証のようなモノが入れてあり・・・

「GS？」

「せや。だから、お嬢さんがネコかぶってるのもわかるし、無茶苦

茶不安におもつとるのもしつとる」

優しく撫でてくれる彼に、少しだけ意地悪をしたくなった。

「私は、サイコメトリーのレベル7。そうやって触っててもいいの？」

「ええやろ？　みられたって所詮はエロエロな妄想が渦巻いてるだけや。みとうなければ、みる方がさけるんやろ？」

私は、本当に、心底驚いた。

私のサイコメトリーは、いわば精神への暴力だ。

自分が思っていること考えていること記憶していることを暴かれるだなんて聞いて、こんなにも冷静な人なんかみたことなかった。それどころか、将来の美人さんや、優しくしてれば好印象、？年後にナンパするからデートしてやゝとか失礼なことを堂々と考えている。

というか、公言してるし。

「ぷっ、あなた変な人ね？」

「そうか？　みられるだけで前世まで透視するような神族と修行で生活してりゃあ、この程度はなんて事ねえぞ？」

・・・GSってすごいのね。

「ま、みる方もみられる方も仁義守ってりゃあ、問題ねえし」
「へえ・・・」

私はBABELの迎えが来るまで、彼と時間を忘れて語り合えた。こんな私が、まるで子供のように語り合える相手。

少なくとも唾の一つでもつけておくべきじゃないかしら？

それに「GS」ということは、色々と経験があるだろうし、ウチにもプラスになるだろうし・・・

うん、結構おもしろいかも!!

よし、きめた!

「ね、薫ちゃん、葵ちゃん。ちょっと相談があるんだけど・・・」

「なんだ? 面白いことか?」

「なんやなんや、なんや面白そうなネタっぽいなあ?」

「ふふふ、もしかすると、今までの退屈と不満が一気に解消するかもしれない大ネタよ」

うん、二人ならいいかな?

私たち三人で、あなたを教育してあげるわ。

覚悟してね、横島忠夫さん。

第一話 少女は出会った（後書き）

シホは、能力の関係から大人びた発言が多いですが、実際は一番子供なんだと思います。ただ、それを表現できる相手が居ないだけで。

そんな思いで、ちよこつと短編連作風に書きました。

他の連載もありますが、まあ、ご勘弁を。

「書きたいものを書く、それが執筆ってもんだ！」とバサラ風。

第二話 後悔するは我にあり（前書き）

とりあえず、タイトルにはあんまり意味はありません W

第二話 後悔するは我にあり

第二話 後悔するは我にあり

サイド 少年TY

美神美智恵。

オカルトGメンの筆頭だが、現在産休中。

そんな彼女に俺は呼び出された

呼び出された先はオカルトGメンではなく、都内の喫茶店だった。暗殺でもされるんだろうか、なんて馬鹿なことを考えたんだけど、正面居座る女性の不機嫌なオーラをみると大損こいた時の娘に似ている。

つまり、かなりまずいわけだ。

暗殺なんつうのも嘘じゃないと思えるほど。

「横島くん、お話聞かせてもらえる？」

「ういっす」

隊長の話は「BABEL」に関するものだった。

霊能ではない、科学的なアプローチをされたオカルト、超能力を研究推進している国の機関、だったはずだ。

「そうね、その理解で正しいわ」

で、霊能と超能力、じつは結構仲が悪い。

いや、人間同士ではなく、組織同士が。

基本、霊能でも超能力でも異能は説明できるんだけど、アプローチ

チが違うせいで、いろいろと食い違う。

霊能の場合、まあ、伸ばせる個人能力であったりするんだけど、超能力の場合、社会浸透できていない力というカテゴリーになる。

なぜ社会浸透出来ない力扱いかと言えば、簡単に「制御不能」者が多いからだ。

霊能の場合、背後に神魔がいるため色々と制御技術が確立されているけど、超能力は今一歴史がないため、その被害が大きく、社会的反発が少くない。

立場の違い、意見の違い、色々あるけど、やっぱりBABELとGSの違いは、BABELは子供の保護が法律面で保護されているけど、GSは商売なのでそうはいかないといったところが反発の原因ともいえるだろう。

そう、隊長率いるオカルトGメンは高卒以上じゃないと雇えないけど、BABELは理論上何歳でも青田買いできるのだ。

つまり、隊長にとって、将来有望な若者を国のバックを得て好き勝手に喰い荒らしている存在こそBABELであり最大の敵だというわけだ。

「で、そのBABELが、なんすか？」

「・・・超能力者チーム「ザ・チルドレン」の現場指揮官として雇いたいそうよ」

「美神さん通してください」

「令子は札束握りしめて一年単位のレンタル契約なら、ってOKでしたそうよ」

「・・・聞いてねえし」

思わず頭痛。

というか、美神さん、あれこれ理由付けて現場から離そうとしてるな？

ということは、これはいわば休暇つうことか・・・。

「で、何で俺なんすか？」

「それを聞きたいの。聞かせてもらえるかしら？」

そういつて取り出したのは四冊のファイル。

バベルの内部調査報告書と、チルドレンの調査報告書だった。

一人目、二人目、と見たところで、三人目が目に留まる。

確かこの子は、

「シホちゃん？」

「・・・やっぱり知り合いなのね」

深いため息の隊長。

まあ、なるほどと思わされたのは俺も一緒だった。

「ところで隊長、今までの超能力部隊の指揮官が、普通の人だったって本当っすか？」

「・・・シビリアンコントロールが基本よ。本気で首輪かけさせられてたでしょ？」

「あの、胸くそ悪いアクセサリーはそういう理由っすか」

思わずつぶやく俺を見て、隊長は苦笑い。

「やっぱり引き受けちゃうのね？」

「・・・あの子たちを守るなら、引き受けるしかないと思ってるっすよ」

あの、首筋に見えた火傷の痕が想像道理なら、バベルだってつぶすつもりになってしまった。

「・・・つうか、歴代の指揮官って、ばかっすか？」

「本気でオカルトGメンに任せてほしいわ」「BABELは頭でっかち、オカルトGメンは脳筋、そんな感じに感じるっすけど？」

「・・・否定しづらいわ」

そんなわけで、美神除霊事務所から俺は、BABELに派遣されることになってしまった。

期間は一年間。

ま、どうにかなるだろ？

サイド 少女 K・A

すげーぜ、すげーぜ、ほんとうにすげーぜ！

今度わたしらの指揮官になった男、横島忠夫は「赤裸々」の人だった。

受付のダブルフェイスはナンパする、柏木さんは軟派する、医療チームのナースも軟派する、そう、手当たり次第にナンパして玉砕するんだ！！

あまりの下手さに色々ときさやいたところ、正面から信じて感謝して突撃して叩かれていた。

・・・やべえ、心底すごすぎる。

これがシホの言っていた、全てをひっくり返す存在か。

確かにその通りだな、うん。

「せやけど、横島はん。なんでそんなに必死なん？」

「必死にもなろうもんやろ！ BABELは美人の巣窟や、これでナンパせんのは礼儀に反する！ かわいい女の子にはかわいい、きれいな女の子には綺麗って正直にいわな、男として生まれた意味があらへん！！」

男前だ。

まじ、男前だ。

結構感動してしまった、うん。

葵も何となく感心してる感じだ。

「せやったら、うちらもかわいいとか美人とかおもわんの？」

「わいはロリやないからな！」

「だれがロリだー！ー！ー！！！」

やべ、おもいつきり、リミッターぶちぎりで「やっちゃった」。
見れば壁にめり込んで血を吹き出す横島。

あちゃー、面白そうなおもちゃだったのに、一日で壊しちゃった。

「ごめん、シホ。一日で壊しちゃった」

「ふふふ、その程度じゃ壊れないわよ？」

え？

そう思って振り返ると、なぜか額から血を流している「だけ」の
横島忠夫。

「あほするなやつ、死んだらどないするんやーーーー!!」

いや、ふつうなら即死だって。

・・・つうか、何で生きてるんだ？

「この程度、美神さんのシバきに比べれば、屁でもないわな」
「・・・まじ？」

「おう、少なくとも、この10倍でも耐えるで」

す・・・すっげえ・・・。

思わずキラキラした目で見てしまう。

「なんや、その、絶対壊れなんおもちゃを手に入れた子供みたいな
目は・・・？」

「あー、横島はん。的確な表現や」

「まじ？」

「まじや」

ひゃっほーーーーー!!

横島指揮官歓迎、大歓迎だあ!!

第二話 後悔するは我にあり（後書き）

えー、実は皆本君、BABELに居ますが、担当になりませんw

第三話 共鳴する魂たち（前書き）

わりと、こう、手ごたえがある作品になってしまったW

第三話 共鳴する魂たち

第三話 共鳴する魂たち

サイド 少女 A・N

なんつうか、一月つきあってわかったけど、横島はんは裏表のない人やった。

女大好き、セクハラ大好き、美女美少女の味方なんて事を公言しとる癖に、逆にアプローチされると逃げ出すヘタレ。
そんなことを警護官の逆木はんに言うと、苦笑やった。

「あいつは、わざわざ断られるタイミングで誘ってるんだ」
「なんでや、何でそんな無駄なことしとるんやろ？」
「・・・なんでだろうな？」

苦笑いの逆木はん。

こんな時に問答無用のシホも、苦笑いやった。
なんか、うちらが踏み込んじゃまずい問題があるみたいやな。

「なあ、なあなあなあ、横島！」

「なんや、薫」

「横島の所属してる事務所って、あの「美神令子」の事務所なんだよな！？」

「せやで」

感動に身を震わせる薫は、横島はんに抱きついた。

「なんとしてでも温泉旅行に誘え!!」

「あんなあ、無茶も大概に・・・」

「代わりに私は姉ちゃんと母ちゃんを呼ぶ」

「ん？」

「私の名前は「明石薫」、姉ちゃんは「明石好美」、母ちゃんは「明石秋江」!!」

「がーん、とショックを受ける横島はん。

「そりゃそうや、薫の姉と母親いえば、芸能界のトップビューティーやから。」

「つうか、薫、トラウマ抱えとる家族を使うって、ドンだけ必死やねん!!」

「おれは、おれは、「明石好美」の写真集を持ってる、すごいエロいの持ってるう!!」

「私は、「美神令子」の特集写真をもってる、すごいエロいのもってるう!!」

血の涙を流してスクラム組みよった。

「わかった、わかった! 美神さんに加えておキヌちゃんも誘う!」
「うおおお! 現役ネクロマンサー最若手、女子高生え!!」

わーっと盛り上がる二人。

ほんまもんきょうだいの兄妹みたいやな。

「で、どうなんだ、そっちの姉ちゃんたちは?」

「ありゃあ、こう、姉ちゃんも母ちゃんも、一緒に風呂にはいると、もう、こう・・・どっちもこっちもすげーってかんじで」

「ほうほう・・・」

ぼそぼそと頭を寄せあつてゐる姿は微笑ましいんやけど、内容が内容なのがあ。

これさえなければ薫も横島はんもええ人なんやけどなあ。

「葵、シホ、絶対温泉旅行だからな!!」

「はいはい、わかつてるわよ」

笑つてゐるシホ。

あんた薫甘やかしすぎやろ？

「なんやったら、家族も呼んだらどうや？ 弟さん、健康になつたそうやけど、あまり遠出もしとらんやろ？ 金なら心配せんでも俺が出す」

うっわあ、すごすぎや。

横島はん、このへんが男前なんや。

何しろ横島はんはGS。

基本、金持ちなんや。

その上で、普段ふつうの男子高校生並の金の使い方なんやけど、ここ一番で出し惜しみせん。

私らへのプレゼントとか、何かの記念とか、そういう乙女心に直撃なイベントで出し惜しみせんから、普段がしょぼくてもぜんぜん平気なんや。

「ほれ、ユウキ君も”姉ちゃんと温泉いきたい”って」

ほいっと渡された携帯電話の画面には、本当にユウキのアドレスのメールが入っていた。

「って、なんでユウキのメールが!？」

「あ? ああ。担当指揮官になってからな、普段の写真とか日々の活動とかをご家族にメールしてるんや。せやから結構仲良しやで」

さすが横島はん、なにげにマメや。

「え、ええ? じゃあ、かあちゃんたちにも?」

「・・・うちの両親にも?」

「ん、薫の母ちゃんたちが「アレ」なのは知らなかったけど、ふつうに季節の挨拶っぽいメールはやりとりしてるで? シホのご両親、つうか親父さんには写真の撮り方の指導メールが毎度来るしな」

うっわー、と顔をしかめた二人やけど・・・

「で、どんな写真おくつとるんや?」

「そ、そうだ、変なの送ってねえだろうな!？」

「い、いってくれれば、オメカシしたの撮らせてあげるのよ!」

うわ、シホが慌ててる。

これはレアや。

とはいえ、ガサ入れ決定や!!

サイド 少年TY

携帯には、普段の彼女たちが写ってる。

変な写真なんか撮ってるわけがない。

そりゃ、ちょっと油断して子供してる写真はあるけど、そういう写真の方が受けがいいので仕方ないだろ?

「いややあ！　なんでこんな写真撮ってるのお！？」

「くそお！　寝顔は反則だろお、横島！！」

「よ・こ・し・ま・さん、ちよつとOHANASHIしましょうか？」

い、いや、だから！　ご家族も色々心配してて、それでも、自分で守れないことを申し訳ないと思ってて！！

「それとこれとは別の話なのよ、横島さん？」

「せや！　乙女の秘密の素顔を！！　何つうまねをしてくれたんや！！」

「・・・よこしま、覚悟しろよ？」

ま、まってくれ！

「「待たない」」

「あんぎゃーーーー！！！！！！！！！！」

ああ、死ぬかと思った。

「これでいきとる横島はんが、ほんまに人間なんか疑問やわ」

「ぜってー、達人クラスだよな？」

「エロの達人？」

「それは・・・」

第三話 共鳴する魂たち（後書き）

もちろん、読み応えとは別物w

第四話 異能のお仕事（前書き）

ちよつとクロスツぽいかんじ

第四話 異能のお仕事

第四話 異能のお仕事

サイド 少年 T・Y

アホな訓練と日常の合間にも出動はある。

予知された事件の対応や事故の補助なんかに向かう。

時々「オカルト」事件が誤報で予知されるんだけど、そんなときは「チルドレン」が現場までデバって状況判断し、オカルトGメンに引き継ぐのが流れだ。

今までは無理して現場をひっかき回していたんだけど、バベルへの俺の参加によって、オカルト方面へのコネができたため、敵対感情が減ったという話もあるらしい。

「で、横島さん。どんな感じなの？」

「せやな、見たところ、・・・自縛霊。ぷつつん1時間前つうかんじやな」

「そう、じゃあ、私はこれで」

そういつて、ふっと意識を手放すシホ。

彼女は幽霊とか怪談とかをリアルで見るのが苦手なのだった。

「あー、シホ。最近、安心して気絶してるよな」

「せやなあ。まあ、意識失っても、横島はんが襲うワケやないしなあ」

「わいはペドやない」

思わず苦笑いで指揮車に寝かせたシホに視線を送りつつ、現状を

見つめた。

視界の先にあるビルは、数ヶ月前から悪霊が居るという話だったが、オーナーが所有権を放棄しているため、除霊が誰にも依頼されていなかった。

そのため成長してしまい、今に至るという。

こういう物件は、実のところ多い。

というか、増えているという。

高額な除霊料金を払うぐらいなら手放してしまう、というオーナーが多いそうだ。

「・・・つうか、そんなんなら、放棄する前に『冥子ちゃん』に依頼すりゃいいのに」

「冥子ちゃん？ それどんな人なん？」

「んー？ ああ、オカルト大手、六道の次期当主」

「・・・え、そんな人間、高いんじゃないのか？」

「まあ、ふつうに高いけどな。現場損耗率も高いんで、オカルト災害補償支払いでトントンになって、ビルも更地になってお得だと思うんだけどなあ・・・」

一歩引く薫と葵。

「な、なあ横島はん。その六道はんって、どんな世紀末霸王なん？」

「いやいや、見た目ははんなりとした隠れ巨乳の美人やぞ？」

「まじ！？」

「まじ」

で、ぷつつんすると式神12体が大暴走。

何度死ぬ目にあったか・・・。

「横島が死ぬ目？ まじ？」

「横島はんが死を覚悟したって、どんなんや・・・」

まあ、なんつうか、あの無差別破壊は一種の大量破壊兵器やしなあ・・・。

正直、魔族と向き合ったときより死ぬかと思ったで。

「「うっわあ・・・」」

でもまあ、本人自身は良い人で、かわいい人やから、安心してな。

「安心出来る要素ないで？」

「・・・はんなりした隠れ巨乳・・・でも死の危険・・・たまらねえ・・・」

薫、それ、死亡フラグだ。

サイド 少女 A・N

「やあ、横島君。待たせたね」

「お、西条。早かったな」

お互いに視線を交わして苦笑いの二人。

やってきたロンゲ公務員、西条はん。

オカルトGメンの暫定責任者で、こういう引継の時に現れる。

「で、どうだね？」

「C、いや、そろそろBー（ビーマイナー）になるな」

「・・・そうか。ではうちの装備だけじゃ無理だってことだね？」

「死人出すつもりなら、ぎりぎりやろ？」

「それは適正範囲を超えてるって言うんだよ」

「んー？ 美神さんの事務所だったら、ランク二つ上までなら根性でこなせる、って言うぜ？」

「・・・令子ちゃんみたいなベテランの、その、経験からくる判断と言うことで・・・」

なんつうか、この二人、はじめの頃は喧嘩ばかりしとったけど、最近結構ふつうの感じや。

「じゃ、どうする？」

「外部委託にするつもりだよ、うん」

「どこにするんだ？」

「令子ちゃん以外」

「本人に伝えていいか？」

「勘弁してくれたまえ」

苦笑いの西条はんを横目に、携帯を片手の横島はん。

「・・・神父はだめ。エミさんむきじゃねえし・・・こりゃ覚悟決めた方がいいぞ？」

「あー、令子ちゃんかい？」

「いや、冥子ちゃん」

「・・・本気かい？」

真っ白になった西条はんやったけど、なにかに気づいたかのように横島はんがビルに振り返った。

「あちゃー、Aー（エーマイナー）だ。半日以内に始末しねえと、霊団化するぞ？」

「わかった、美神事務所と六道事務所に依頼しよう」

「うまい手だな」

「令子ちゃんに恨まれるよ・・・」

燃え尽きた感のある西条はんを背に、横島はんは私たちに手を振る。

「美神さんたちが来たら、現場引き継いで終了だから、指揮車の中でも寝てろや」

「・・・横島、あの、ボン・キュ・ボン、がくるのか？」

「おう、だから来たら起こしちゃうから、ちよつとねとけ」

「絶対だからな、絶対起こせよ！！」

びしっと人差し指を突きつけながら確約させた薫は、気絶中のシホを抱き枕にシートに身を沈めた。

「葵もねとけ」

「うちぐらいは起きといった方がええやろ？」

実は三人の中で私だけが靈感を認められている。

「・・・じゃ、時々ビルに意識を向けてくれ。変化あったら声かけてな？」

「まかしとき」

ぴしっと人差し指をたてると、嬉しそうにほほえむ横島はんに撫でられてもうた。

「ところで、横島はん。さっきの話、なにがええ手なん？」

「ああ。実は冥子ちゃんも美神さんが好きでね。苦楽を分かちあう友、って盲信してんだ。だからこの仕事を一緒に出来ると知ったらどんな手を使っても一緒に仕事するように手配するに違いないからな。で、格安で一流事務所を二つ使えるオカルトGメンは、額面上では得してるって事だ」

「実際はどうなん？」

「・・・聞かんほうがええ」

黄昏てるで、横島はん。

サイド 少年 T・Y

美神除霊事務所一行が現場に来たのは、僅か一時間後のことだった。

仮眠していた薫とシホも起き出して、美神さんたちに挨拶してる。

「いつもウチの横島さんがお世話になってます」

「うっわー、まじでマジで、エロエロだあ！！！！！」

「ちょ、ちよっと、なに、この横島みたいな少女は！？」

「うは、やわらかいなーいいんにおいだなあー！！！！！」

「横島君、たすけてえ！！！」

ま、さすがに仕事にならないので薫を引きはがしたが、薫は薫で満足したようだった。

「かーちゃんや姉ちゃんを越えるワガママボディ、堪能したあ・・・」

「今度やったら金取るわよ！」

「任せて、まかせてくれ、BABELの予算をたたき込むからあ！」

「たたき込ませるか、ての」

「あ、いて」

興奮した薫を叩いて肩車位置に移動。

「すみません、美神さん。うちの子たち、かなり奔放で」

「・・・あんたの教育が生きてるって感じよ？」

「いや、さすがにあそこまでの性犯罪は、たまにしか・・・」

「「たまにやってるのか!？」」「」

「いやー、心のうちに秘めるだけっすよ？」

こんなバカ話をしているところで、おキヌちゃんとシロの準備が出来たようだ。

「あれ、冥子ちゃん待たないんですか？」

「本気で聞いているの？ 横島君」

「いやー、一応、確認までに」

まあ、合流する前に潰しておいた方が。色々安全だよな。

「じゃ、行ってきますね、横島さん」

「先生、みていてほしいでござる！」

とまあ、俺がいないフォーメーションが形になっているのを見ると、少し寂しい気もしないでもない。

「横島さん、居場所の一つじゃないわよ？」

「・・・ありがとな、シホ」

きゅつと俺の右手にすがりついたシホを、ゆっくり撫でる。

色々な思いは去来するけど、シホに見せられんようなものじゃないし、そのまま読ませるに任せた。

「ねえ、横島さん」

「ん？」

「横島さんの恋人って、あの三人の中の一人じゃないの？」

「あはははは、世界の美女が俺の女じゃ」

「もう！結構真剣に聞いているんだけど？」

「んー、まあ、真剣であればあるほど教えられんかなあ」

「それって、私たちが信用できないって事？」

「信用も信頼もしてる」

ちよつと見ればわかるやろ？ シホ。

「・・・うん」

「でもな、心の傷ってのは、そう簡単に癒えるもんやないんやで？」

第四話 異能のお仕事（後書き）

G S 関係は書きなれちゃったせいか、投げっぱなしになっているj
気もしますね

第五話 心のある場所（前書き）

私の稚作であるところのGSモノとは違い、傷癒えぬ状態の本作ヨコツチ

こんなかんじです

第五話 心のある場所

第五話 心のある場所

サイド 少女 S・S

私は後悔した。

ちよつとしたキーワードで連想される記憶から、横島さんの心の奥底を覗こうとしたことを。

そして少し覗いてしまったことを。

彼の心は、とても大きく暖かい、居心地のよいところだったのに、一つの扉を開けて、その隙間を覗いてしまって、そこに広がる絶望の濃度に気を失うかと思った。

今まで多くの人々の心の底を見てきたけれど、ここまで、ここまでに絶望に彩られた人は見たことがなかった。

比較的に重かった人と比較しても、比べものになるものではなかった。

「・・・」

思わず絶句した私を見て、横島さんはその辺が読まれたことを知ったのだろう、苦笑いで頭を撫でてくれた。

「・・・シホ。今のを忘れたいなら、完全に忘れることが出来るで忘れるか？」と小首を傾げる横島さんに、私は強く首を横に振る。

「これは、これは私は愚かで幼かったという証。これを忘れたら私はまた繰り返しちゃう。だから、忘れさせないで・・・！」

懇願であり決意。

それを横島さんはわかってくれた。

「わかった。でもな、夜魘された、眠れなかったら言えな？ その瞬間だけでも眠れるようにしたるから」

「・・・うん」

私は抱きしめる。

後悔と、決意と、そして優しく包んでくれる男を。

サイド 少女 K・A

最近、シホが横島にべったりだ。

まあ、あたし等全員、横島にはべったりなんだけど、何となく、今までと立ち位置が違う気がした。

こう、なんつうんだろ？

今まで、あたし等と一緒に横島をもてあそんでいた感じなのに、今は、こう、

「母親位置やろ？」

「そうそう」

サイコメトラーであるシホにとって、心や頭の中を覗かれて平然としていて、さらにその平然としている気持ち表裏一体である横島は貴重な存在だ。

今までそんな存在なんか、数少ないものだった。

老人か、老人レベルまで精神が枯れた人間程度しかいなかったとも言える。

でも、横島は違う。

明るくて楽しくて、それでいて暖かい。

超能力で叩きつけても平気だし、大けがしても直ぐに復活するトシデモ超人。

医療部の馬さんも「忠夫ちゃんは異常ネ」と笑っていたぐらいだ。開発部の秋雨さんも「あれはいつか解剖したいね（キュピーン）」とか言っていたし。

いやいや、そうじゃなくて。

「まあ、シホは精神関係の能力やから、精神的な成長はあるんやろうけど・・・」

「で、横島にガクガクにされて、隣を確保したくなった？」

「そりゃ、うちらかて欲しい場所やろ？」

「まあ、な」

そう、横島忠夫の隣。

心底欲しい場所だ。

でも、横島の周りって、心底いい女ばかりなんだよなあ・・・。

「つまり、シホは、うちらから見て位置を変えたんやけど、実際は、ほかの女に対する牽制つうこっちゃない？」

「あー、むずい話はおいといて・・・」

書類仕事をしている横島の隣で、にこにこしながらマンガを読んで寄りかかっているシホを見る。

「横島も、シホも、葵も、みーんなあたしんだーーーー！！！」

「薫、おめー、美神さん以上のワガママさだな？」

え、あたしも、あのワガママボディーを手に入れられるのかあ！？
うひょーーーー！！

ワガママボディーを手に入れて、絶対可憐に横島を誘惑しちゃる！

「あ、それいい。薫ちゃん、私もそれに参加」「うちもうちも！」

よかったな、横島。

将来はモテモテだぞ？

「おれは谷崎主任ちゃうわーーーー！！！」

第六話 男の矜持（前書き）

一応、作風なので「サイド」を入れていますが、一人称ですW

第六話 男の矜持

第六話 男の矜持

サイド 少年 T. Y

くだん
件の谷崎主任。

全身打撲で入院した。

聞けば、指揮担当の梅枝ナオミちゃん的能力が安定せず、出勤中や訓練中にミスが発生し、その事故に谷崎主任が巻き込まれているそうだ。

安定しないって言っても、計測訓練やらウチの「ザ・チルドレン」と合同同期訓練の時は変じゃないんやけどな？

ま、とりあえず……

「(なに？ 横島さん)」

周囲の視線の外で「指」招きでシホを呼ぶ。

「(なんか、精神的な重圧があるとおもわんか?)」

「(あら、おもしろそうな話ね?)」

そんなわけで、シホによる (精神) 潜入捜査開始。

細かいところはシホに任せておけばいい。

おれは、谷崎主任にでも事情聴取すつか。

谷崎主任には、色々と噂が絶えない。

ノーマルとエスパーの架け橋になる事への尽力、一般学校へのエスパー参加活動、非能力者による迫害や差別を排斥、とまあ、数えれば数えるほど実績がすごい。

表の実績だけなら、エスパー支持者の得票で議員にだってなれるレベルだ。

が、評価されちゃいけない部分の方が有名すぎる。

「光源氏計画遂行者」

12の頃に見いだしたナオミちゃんを、ここまで育てた実績はいけど、谷崎主任、いやさ、おっさん、まじで自分の好みに育てようとしてやがる。

あまりの外道さに、俺はかなり交流を持たないようにしてるけど、ナオミちゃんは美少女なので是非ともお付き合いしたい。

だから、それなりに交流チャンネルを持つてる。

そんなわけで・・・

「ちーっす、谷崎主任。いきてますかあ？」

「ふっ、ナオミを残して早々死ぬるものか！」

「あー、死んでください、ロリコン」

「なにお！？ きさまとて、イタイケな少女を自分好みに育ててるだろうが、それも三人！！」

「アホ言うなや！ わしはロリやない！！」

「ふふふ、知っているぞ。最近、三人がベットのの中に潜り込んでくるので、面倒だからと一緒の部屋で寝起きしているんだろう？」

「あのなあ、あんたみたいな腐った欲望はないわ！ 手の掛かる妹みたいなもんや！」

「そう言っていられるのは、第二次成長前までだぞ？」

「・・・くう、この説得力、経験者は違うちゅうことかあ！」

「ははは！ 早くこちらに目覚めたまえ、横島君」

「行くかぼけえ！！」

と、まあ、こんな会話をしてるのも、谷崎おっさんがどれだけ危険かを周知徹底させるためだったんだけど、BABELではやりわりと受け止められてしまっている。

でも、今は病院。

周りの人、このおっさんは危険人物ですよ？

「そうそう、横島君」

「なんですか？」

「・・・ナオミに手を出したら、物理的にこの世からいなくなるから、覚悟したまえ」

「ナオミちゃんと良いこと出来るなら、魔神とだって戦いますぜ？」

「君が言うマジっばいんだが？」

「冗談やとええですねえ？」

まあ、さすがにナオミちゃんにセクハラしたら俺が悪者っぽいからしないけど。

「ま、冗談はさておき、うちとの合同訓練では何も異常ないっすから、なんか別の問題でもないっすかね？」

「んーーーー」

「一応、練習カリキュラムやら指揮内容のログも見せてもらったすけど、うちのザ・チルドレンと大差ないっすよ」

「んーーーーー」

「一応、うちのカリキュラムで預かるっすけど、バックログは週一で良いっすか？」

「毎日に決まってるだろう！」

あー、ロリコンロリコン。
Y O U ロリコン、N O タッチと決まってるだろうに・・・。

第六話 男の矜持（後書き）

谷崎主任はこのままフェードアウトの予定。

なむなむー

第七話 ショック（貞操的な意味で）（前書き）

一応、コミックを頼りに話を練っていますが、スリップすることは多大にあります。

交通事故的な意味で！

第七話 ショック（貞操的な意味で）

第七話 ショック（貞操的な意味で）

サイド 少女 N・A

いや、まじで。

ロリコン殺すべき、やと思った。

シホの見立てで、ナオミはんは精神重圧でオカシいらしい。
どうおかしいかは、目の前の騒ぎでわかった。

「裏タダオモード！」

欲望ダダモレ状態の薫に襲いかかれて、ナオミはんが切れた。

「てめえ、中年は中年同士で絡んでやがれえ！！！！」

「はーん♪」

半裸のナオミはんをみれて昇天した薫は良いとして、自分の中の
気持ちに気づいたナオミはんは、少し落ち込んでいた。

「・・・あのね、私は、尊敬してたんだ」

誰とは言わない。

でも、その尊敬していた人が、なんと自分のことをねらっている
と気づいてしまい、危機感を覚えたという。性的に。

尊敬したいという心と身の危険。

この板挟みが不調の原因やった。

「・・・うつわあ、あのモジャモジャに・・・」

「いわないで、葵ちゃん!!」

やば、そのへんもトラウマみたいや。

「横島さんの見立てどおりみたいね」

「なんや、横島はん。わかつとったんかいな？」

「細かく分かったて訳じゃないらしいけど、何となく知ってる人間関係を思い出したって言ってたわ」

「だれなん？」

「美神令子さんとオカルトGメンの西条さん」

「うつわー、まじで？ あの人、そう言う人なん？」

「おにいちゃん、おにいちゃんと懷かれてた頃が忘れられないらしいわよ？」

「「へー」」

いつの間にか復活した薫と、なぜかナオミはんまで参加。
恋バナは、乙女心の燃料やなあ。

「ま、とにかく。エロおやじは死すべきね」

「「賛成」」

乙女会議は満場一致。

「でもさ、手を出して欲しいのに手を出してくれないのは、どうおもう？」

「・・・えっと、薫ちゃん。それなりに犯罪な気がするわよ、あなたたちだと」

「・・・ナオミはん。乙女はいつでも命がけや」

「葵ちゃん、かかっているのは社会的責任と社会的立場とか、もう、人生の上で大切なものだから」

「大丈夫よ、ナオミさん。ぜんぶ忘れさせてあげればいいんだから」
「・・・シホちゃん。だからそれがまずいんだってば」

乙女会議紛糾。

まあ、これもリアルな話や。

サイド 少年 T. Y

病院から戻ると、子猫のようにじゃれあう三人十一名。

あー、ナオミちゃんみたいな美少女が、うちの子たちと戯れる、ええ光景や。

思わず和んでいたら、向こうでこっちに気づいたらしい。

「なんや横島はん。いやらしい目でうちら見たらあかんよ？」

「もう、横島さんってば。言ってくればどんなポーズだってしてあげるのよ？」

「お、おお！！　つまりあたしらから女を、女のエキスを感じたつうことだな！」

「アホ言うなや！　わいの視線はナオミちゃんに釘付けやったわ！
！」

「「（怒）！！」」

やばい、と思った瞬間、壁に貼り付けられた。

「てめえもロリかあ！！」

「俺とナオミちゃんの年なら合法で健全やあ！！」

「それでも何だか許せないからサイキックプレッシャー！！」

「まけるか、サイキックシールドー！！」

「くう、やるな、横島ああ！！」

「わいの煩惱は底なしやあ！」

「「うおおおおお！！」」

って、あかんあかん、よけいな煩惱燃やしてもうた。

閑話休題

読み通り、ナオミちゃんの不調の原因は谷崎主任との人間関係だった。

つうか、補食者が常に隣にいるんだから、そりゃ心も安まらんわな。

尊敬したい気持ちと嫌悪感に揺れるナオミちゃんだったけど、それとこれは別なんやで？

「・・・どういことですか、横島さん」

尊敬とかそう言う気持ちって言うのは、いわば、対外的な評価。

会社で言うなら「課長」とか「部長」って立場に対する敬意。でも嫌悪ってのは、個人に対する気持ち。

気持ちを評価で上塗りするから気持ち悪いんや。評価を気持ちで上塗りした方が乙女っぽいで？

「・・・はい」

晴れやかな笑顔。

まるで、そう、おキヌちゃんみたいだな、と俺は思った。

「・・・ところで、横島さんとなら、私って合法で健全なんですか？」

「合法で健全で微笑ましいやろなあ・・・」

「・・・♪」

「「「ナオミ（はん）（さん）（ちゃん）？」」「」」

「ぎゃーーーーー♪」

ほんま、かわいい絡み合いやなあ。

煩惱もわかへん。

第七話 ショック（貞操的な意味で）（後書き）

こんなん、よこっちやあらへん、という意見はスルーします。

第八話 疑念と不安の隙間

第八話 疑念と不安の隙間

サイド 少女 K・A

そんなこんなで、エロかわいいナオミちゃんが、あたしらのチームに組み入れられた。

谷崎主任は治療＋療養で隔離中。

あのおっさんは、少し反省すべきだと思っぜ、あたしは。

「まあ、悪い人間じゃないけど、だめなおっさんではあるな」

「横島さんは、だめな男？」

「シホ、あんま本当の事言ったらあかん」

「どちくしょーーーー」

とまあ、こんないつもの流れにナオミちゃんが入ると・・・

「ナオミちゃん、君の膝で泣かせてくれえ！」

「あはははは、膝だけですよお？」

「ああ、きみはええ子やあ」

と、なぜかナオミ落ちになっちまう。
なんか悔しいな。

「横島、あたいの胸を貸してやっても良いぜ？」
「あと十年後に言ってくれ。喜んで借りるから」

十年か、なげえな。

ていうか、子供発言しない代わりに、そう言うリアクションはねえとおもうぜ？

そんなこんなで、合同待機室。

「つうかよ、最近の横島、ナオミちゃんに頼りっぱなしじゃね？」

「そういえば、私たちと横島さんの部屋にも通い妻状態ね」

「・・・おなじチームやし、あんまグダグダ言いたくないんやけどなあ」

と、あたしらがにらむと、なぜか「あははは」と笑うナオミちゃん。

もしかして、本気で狙ってる？

「あー、結構引かれてるかも」

この爆弾発言に焦ったあたしだけど、シホも葵も「やっぱり」と呟くばかりだった。

「え、え、意外じゃねーの？」

「あんな、薰。じつは横島はんの競争率、無茶苦茶高いで？」

葵の説明じゃあ、BABELのエスパー女子の中では結構人気が高くて、あのダブルフェイスもねらい始めたらしい。

あの、ダブルフェイスも!!

「じゃ、じゃあ、あのダブルフェイスも加えて、王様ゲームで無茶言ったり出来るんかあ!？」 横島うらやましい!!」

「無茶いったらあかんやろ？」

そう考えてみると、実は横島の周りって美女ばかりだよな。
もしかして、みんなひかれてんのか？

横島ハレムなのかあ!？

「くそお、妬ましい、うらやましい、あたしにもわけてくれえ・・・」

「薫ちゃん、悔しくて血の涙を流すのは、横島さんっぽいわよ？」

だってよ、横島だぜ横島!!

ザ・チルドレン、あたし等の指揮官だぜ!

なんでほかの女に持ってかれなくちゃいけないーんだよ!

「あ、本音がでたな、薫」

「薫ちゃん、ツンデレ？」

「あー、薫ちゃんって、その辺の感情がまだだったのね」

「そうなんや、ナオミはん」

「薫ちゃんのかわいいところなのよ？」

なんだなんだ、なんかわからないけどムカつくぞ、なんかかわからないけど!!

「おーい、予知班から・・・」

「サイキック、八つ当たりいい!!!」

「理不尽やあ!!」

・・・なんでだろう、横島に当たると少しすつきり。
やっぱり、私らには横島は必要。
これ、決定。
だから、いなくなるなよ、横島。

第九話 生ぬるい地獄（前書き）

というわけで、出来てる分、一気にアップ終了です。

第九話 生ぬるい地獄

第九話 生ぬるい地獄

サイド 少年 T・Y

無理矢理学校を卒業させられたけど、まあ、高校にはまだ席はある。

つか、俺の席に愛子が居るんだけど。

暇ならいつでもきて良いぞ、と言われてるけれど、さすがに行き辛かった。

まあ、仕事なら別だがな。

チルドレン&キャッツチームが向かったのは、あの俺の高校。

下校時刻を過ぎた後にエスパァーが進入して、残っていた生徒を人質にしているとか。

女子高生を人質になんて、許せねえ！ とか叫んでる薫はさておいて、シホも葵も怒ってる。

ナオミちゃんもかなりご立腹。

「・・・せっかく、せっかくふつうの生活をしてる人を、出来てる人を・・・」

俺なんかもそうだけど、能力を持っている人間というのは、それなりにふつうの生活は出来ない。

そう言う意味では、ナオミちゃんなんかかなりうまく行ってるはずなんだが、今日はその「ふつう」の予定をつぶされたわけで、か

なり「キテ」いる。

まあ、お友達との「カラオケ」楽しみにしてたもんなあ。

練習につきあわされて、久しぶりに「カラオケただちゃん」モードに入ったし。

「まずは現場確認。シホ頼む」

「はい」

地面を通してリードすると、どうやら俺の居たクラスに立てこもっているらしい。

なんつう迷惑な。

あそこには愛子が……

「まさか、愛子か？」

思わず呟いた俺を取り囲む三人。

「横島はん、その愛子ってだれや？」

「横島、浮気か？」

「いいのよ、横島さん。最後に私たちのところに帰ってきてくれるんでしょ？」

愛子は、俺の友達の妖怪だ。

「妖怪？」

「ああ、机の九十九神でな。学校で青春したくてしたくてたまらなかつた想いが募って、妖怪になったんだよ」

「「「「……」」」」

現在学校に行っていないチルドレンや、普通学校に通っているナオミちゃんにも思うところがあるのだろう、押し黙った。

「もしかして人質が愛子なら、どうにかなるぞ？」

「どう言うことですか、横島さん」

愛子が普段見せている女子高生の姿は映し身だ。

本体は古い机だったりする。

その机を壊されない限り愛子は無事だし、逆に映し身を人質に取ってるなら・・・

「とってるなら？」

「・・・愛子の奴、学校ジャックつう状況に酔ってるだけだな」

「「「・・・」」」

「ああ、夕闇の学校で暴漢が進入、かつてのクラスメイトがわが身を省みず救出にくる、青春よね！！　とかな？」

何ともいえない視線で校舎をみる四人だった。

「横島さん、その予想、あたってるみたいよ？」

「ほんまや、黒髪の女の人が窓際で手をふっとる」

「・・・美人だな、横島」

「まあ、美人で、ええ体しとるぞ？　本体机やけど」

再び何ともいえない視線で俺をみる四人。

なんや？　なんか文句あるのか？

わいは赤裸々スケベやぞ？

エロい体なら、妖怪でも神族でも魔族でもなんでもこいや！

「さすが横島、そこに痺れて憧れるぜ！」

「はっはっは、まかせろ」

「つうわけで、いろいろ美人紹介してください！！」

「薫ならええやろ、どんとまかせんかい！」

なんか、ほんまものの「弟」相手にしている気もするけど、これ、
「妹」だよなあ。

まあ、妹でも弟でも、関係ないけどな。

と、まあ駄ボラ話はおいというて・・・

「シホはこのまま監視、葵突入、本体の机の転送。葵に向かってきたバカを薫とナオミちゃんが迎撃。怯んだところでESP錠を葵が転送、状況確認したシホの指示でBABELのみなさんが突入」

という流れを説明したところ、四人は力強くうなずいた。

「じゃ、さっさと解決させようぜ。『ザ・チルドレン』『キティ・キャット』解禁！！」

「「「了解！！」」」

サイド 少女 N・A

作戦通りに進んで、目の前にはESP錠をされた少年が座ってる。
両眼に涙を流して。

「おれれが俺が間違ってた、師匠う!!」

「そうや、そうや、エロは一日してならずや!」

がつつり抱き合う姿は良いけど、どうするつもりかしら、この犯罪者を。

「でもおれ、レベル2なんて中途半端な能力で・・・」

「いうな! 力の大小なんか関係ないんや。それに向かい努力する気持ちがあるか無いか、それだけや!」

熱い台詞だけど、つまり、あそこに送るんやね。

「・・・なります、なって見せます、特務エスパーに俺は、・・・なる!!」

「その熱意に答えて、本日から君を指導してくれるすてきな先生をご紹介します!」

ぱちんと横島さんが指を鳴らすと、現れたのは四人の陰。

「まず、BABELが誇るマッド研究者、岬越寺秋雨先生!!」「いやー、忠夫君がデク・・・ではなく弟子を紹介してくれるときいてねえ楽しみにしていたんだよ」

「次に、武闘一直線、殴られる前に殴れの護衛官、逆鬼至緒先生!!」「おお! 肉の壁に使っていいエスパーが居るって聞いてな、楽しみにしてきたぜ!」

「さらに、なぜかBABELで仕事してないけど毎日居る裏ムエタイ界の死に神、アパチャイ先生!!」「アパチャイ、絶対死亡遊技チルドレンのファンね!!」

「最後に、心停止程度だったら一撃で変えてくるネの合い言葉の馬剣星先生!!」「死んで楽になれるなんて思っちゃだめネ」

完全にびびっとるわ。

「あ、あの、僕でも特務エスパーになれるんでしょうか？」

「なれるか、かね？ 私たちに任せてくれれば、そんな疑問なんか吹っ飛ぶさ」

「じゃ、じゃあ！」

「もちろん、成るか死ぬか、そんな感じだね」

「うぴよっぴよー！ー！ー！ー！！！！」

そんなわけで、屈強な肉体の男たちに連行された少年を、私たちは見送った。

「ところで横島はん」

「なんや？」

「ほんまに特務エスパーになれるん？」

「あー、常識的にはなれんけど、相手は秋雨さんやからなあ・・・」

あのひと、まじでチートやからなあ・・・。

「横島君！！」

机を担いだ女の人が横島はんに駆け寄った。

「愛子、無事やったか」

「・・・怖かった」

ひっそりしがみつく姿は絵になるんやけど、なんやろ、このムカムカくる感情は。

「うっはぁ・・・スレンダーなのにこの胸の感覚、たまんねえ・・・」

「・・・って、この女の子なに！？」

不意に机が薫をのみこんだ・・・って！

「「「食われた！！」」」

「あー心配いらん、愛子。あれはただのセクハラ幼女やから。あとみんな、あれは単純にテレポートとラップにハマったようなもんやから、食われたわけやない」

「「「・・・」」」

納得しといた方がいいんやろうけどなぁ・・・。

しばらくして現れた薫は、青春万歳といいつつ、妖怪のお姉さんに抱きついたけど、セクハラはなかった。
洗脳されたんやろか？

サイド 少女 K・A

やるぜ、横島！！

あの美人妖怪愛子ちゃんを、BABELでスカウトしやがった！
まあ、三人を担当している上に女子高生まで追加されたんだから
大変だろうし、美人が増えるのは大歓迎だしいいんだけどな。

「えー、っと。横島君が任期中の補助をすることになった机妖怪の
愛子です。よろしく！」

・・・任期中？

「ああ、だって、わいの任期は一年やったやろ？」

気づけばシホも葵も血の気が引いていた。

あたしも、あたしも、本当にその存在を忘れていた。

そう、横島は、横島は、あと一年もしないうちに任期を終えてしま
う。

・・・居なくなってしまう。

「・・・よ、よ、横島」

「なんや？」

「任期、延長って、ねえのか？」

「んー？ わからんなあ。でも、今の運用実績は今までにない効率
やって話やし、要望が集まればBABELも動くんや無いか？」

いつの間にか、あたしも、シホも、葵も、そしてナオミちゃんも、
みんな手を握り有っていた。

「横島はん、うちらを、捨てるん？」

「横島さん、私たちって邪魔？」

「横島さん、横島さんにとって、私たちは、仕事だけの関係ですか

「？」

あたし等を見ていた横島は、苦笑いで順番にあたし等の頭をなでた。

「無理矢理学校卒業させた、陰謀幼児の台詞やないやろ？」

「そ・・・それは謝るわ、あやまります！！だから、だから！！」

必死にすがりついたシホを抱き上げた横島は、こつんと額をシホと合わせた。

「わかるやろ？ 言葉にできんだけど、こんな気持ちや」

「・・・はい」

細い涙を流したシホは、ほほえんでいた。

作り笑いじゃない、本当のほほえみ。

それを見てあたし等の心は少しだけゆるんだ。

大切なものが奪われるような、そんな緊張から解放されたのだ。

「・・・えーっと、もしかして、私の失言が原因だった？」

「いいや、愛子。そんなことないで？」

シホを片腕で抱いたまま、愛子ちゃんをなでる横島。
なんか、ハーレムだよなあ。

「よっし、葵、あたしらも参加だ！」

「まかしとき！」

ヒュッパツ！と横島に抱き付ける位置にテレポート。
ナオミちゃんも「当ててる」位置まで移動！

「このハーレムから逃げられると思うなよ、横島！」

「はーん！！ きもちいい！ セやけど顔に出したら軽蔑されてまう、我慢するんや我慢するんや俺！」

「ちゃんと顔にでてるわよ？ 横島さん」

「ふふふ、横島はんの価値観を、じっくり壊したるからな、覚悟しーや？」

「横島は、絶対Mだから。あたし等が満足させてやるからな？」

「よ・こ・し・ま・さん。当ててますよ？」

「はーーーーーん、生き地獄やあーーーーー！！！」

第九話 生ぬるい地獄（後書き）

これで一区切りしているので、このまま終わらすかも、って感じですが、気合が入ったら続きを書くかもしれませんw

第十話 傾国傾城？（前書き）

えー、やっぱ、これは入れときたいということで、つつこみました
w

第十話 傾国傾城？

第十話

少年 T・Y.

なんつうか、BABELは政府組織の一端なんやなあ、と感心してまうわ。

一応、はじめにGS協会、んで民間GSに頼ったらしいけど、最後の最後まで、あの美神さんに億越えの報酬まで用意していたのに断られたそうさ。

「あつたりまえや」

「そうなん？」

討伐対象、その名も九尾の狐。

かの傾国傾城といわれた美女にして伝説的な大妖怪、の転生体。

「・・・つう俗説や」

「俗説なん？」

「ああ、あのころは政治的にも荒れとったし、九尾が居たときの方が安定しとった。せやけど、それが気に入らん権力者たちにおとしめられただけや」

「よくそんなことわかるわね？」

「みてきたからな」

ありや？ なんでそんなかおしとるんや？

「横島だからな、ありが」

「横島はんやもん、わかるわ」

「横島さん、さすがね」

「横島さん、もう少しその辺の話教えてください」

一応冗談やで？

リーディングによる解析や。

あと秋雨さんの研究論文も影響しとるな。

「」「ああ、秋雨さんか、なるほど」「」

実に納得のいく話。

少女 K・A・

さすがに討伐はいやだった。

この話自体も総務省というか、防衛庁と一部政治家の暴走みたいだし。

面倒ごとはごめんだなあ、とつぶやいたんだけど横島には通じなかった。

「おもしろい話があるんやけどな」

まるでイタズラ小僧のような顔。

瞬間、胸がときめいた。

「お、なんだ横島。おもしろ事か？」

「おう、薫。おもしろ事や」

全員集められて公表された内容は、本当におもしろいことで、心底横島が指揮官でよかったと思わされた。

「でも、そんなもん持ってきてないぜ？」

「・・・もしかして、横島さんのザックの中身って・・・」

「正解や、シホ」

カイグリカイグリとシホを撫でる横島。

子供扱いは反発するシホも、横島だけはいやがらない。

そう、シホが心から気持ちを許している姿こそが、横島を信じる
ことができた一歩だと思う。

シホほどの超度だと、触れば相手がなにを考えているかなど裏
の裏まで読めてしまう。

しかし、そんなシホが、素直に子供としてつき合える相手なんて
この世界に何人いるのやら。

「じゃあ、作戦会議や、横島はん」

重度の人間不信だった葵も、横島にはべったりだ。

そしてわたしも、大人なんて二度と信じないつもりだった私も、
横島だったら信じられた。

たといえ、横島がロリペドで、いまは仮面をかぶっているだけでも
許せた。

なんならアタシ等三人併せてでも良いかもしれない。

そう、それは結構良い話しじゃね？

一人二人じゃハネツケられるかもしれねーけど、あたしら三人力
を合わせれば、ロリペド冥府魔道に引き込めるかもしれねーし。

「妄想禁止!!」

すぱーんとナオミちゃんのハリセン。

「あ、あれ、なんでみんなの視線がつめたいのかなー?」

「全部口からでとったで、薫」

「駄々漏れね、薫ちゃん」

「だれがロリペドやー!」

あれ?

少女 S・S・

横島さんの予想道理、自衛隊に追い立てられた目標が近づいてくる。

併せて目標が通り過ぎたところから、次々とブービートラップが反応してレンジャー部隊が沈黙してゆく。

はあ、本当に何者かしら、横島さんって。

GSじゃなくても局地戦指揮官もできるわよ、ほんとに。

最終ポイントを抜けたところで、デコイと目標を葵ちゃんが入れ替える。

あとは・・・

「おりゃー!」

「はiiiiiiiiiii!」

薫ちゃんとナオミさんのダブルPKで金縛りっぽい演出と・・・

「封印!!」

横島さんによる封印符による封印。

「転送!!」

葵ちゃんによる超長距離テレポート。

「「「発射!!」」」

種子島航空宇宙センターからの打ち上げ成功の報告。

というわけで、大妖怪を新型ロケットの打ち上げ試験に割り込んで、宇宙に廃棄しちゃおうぜ作戦が僅かの時間で成功した。

総予算は何千億なのかしら？

で、実際に打ち上げたのはデコイ。

・・・哀れに思うわ、うん。

この事は、実のところ民間オカルトGSの中では半ば公開されているらしく、作戦の成功で沸き上がる司令部や現場指揮所の様子が動画サイトに公開されて爆笑を誘っているらしいけど、見事騙し通した横島さんは、かなりヒーロー扱いになっているそうさ。

いく先々で「名男優」と呼ばれているのはかわいそうかも。

で、その保護した目標、九尾の狐の転生体は、なんとBABEL

所属のエスパーとして潜り込んだ。

というか、無理矢理潜り込ませた。

ヒュノプスの暴走で、自分が狐だと思っている子供。

同じく念力発火能力も持っている、ということで、BABELで制御技術を学ぶというストーリー！。

コレがまた可愛い。

普段の姿は小さな子狐で、人間の姿になると三歳ぐらいの少女。言葉はまだ不自由らしく、「うきゅ？」とか「うきゃ？」とかいうのよ、というか、これちょうだい、横島さん！！

「おちつかんか、あほ」

すぱーん、と薫ちゃん専用ハリセンが私にひらめく。

「・・・危なかったわ。タマモちゃんがあまりに可愛くて、暴走しちゃった」

「気持ち分かるけどな」

思わず、視線をタマモちゃんに向ける。

休憩中の横島さんの膝の上で、幼女姿で「クカー」とお昼寝中のタマモちゃん。

訓練と言っても、どちらかと言えば社会教育の方が先の状態だけど、それでも進捗は目を見張るものがあり、周囲の上々だ。

先日視察にきた官僚も、タマモちゃんのあまりの愛らしさに骨抜きになり、早々に追加予算をもぎ取ってきたぐらいだ。

「そういう意味じゃ、ほんとうに傾国傾城かもな？」

「薫ちゃん、どちらかというと、甘え上手な孫娘って感じだと思う」

わ」

そう、あの秋雨さんですら目尻を下げるんだから。

「ま、最強 アニキ 兄鬼が、悪さする奴らを許すはずもねえけどな」
「そりゃそうや、薫。横島はん、自分の身内を守るためなら鬼にならはるし」

そうね、このまえの食堂の乱、ちょっと怖かったわ。

あと、逆鬼さんとの殴りあい。

撫でようとした逆鬼さんの笑顔をみて泣き出したタマモちゃん、それを守ろうとした横島さん、逆ギレで返り討ちを誓う逆鬼さん。

どこのゲームよ、ってレベルのインチキ格闘戦闘が展開して、本気で総員退避状態になったものね。

ただ、その殴り合いをみていたタマモちゃんは、気を許しても良い相手だと判断しらしく、以降逆鬼さんにも笑顔で抱きついたり、それを照れながら受け止めたりする逆鬼さんをみたり何だったり。

ほんと逆鬼さんってツンデレよね。

「誰が、ツンデレだ」

声は抑えられている。

なにしろタマモちゃんがお昼寝中だ。

こんなところで騒げば、私たちだって ゲンコツ 激痛麻酔が振る舞われちゃう。

ま、でも、こういう光景で足りないのは、やっぱり・・・

「なんや、シホ？」

隣に座る私を見る横島さんにほほえむ。

「ね、横島さん。子供って可愛いわね」

「そうだなあ、うん。手も掛かるしストレスもあるけど、こーやって平和そうな顔を見ると、守りたいって思うよなあ」

「・・・うふふ、なんだか夫婦の会話みたい」

ちろりとみあげると、横島さんは苦笑い。

ちよつと強引だったかしら？

「・・・うちらもまぜな」

「抜け駆け禁止」

「・・・えーつとまざりたいかなー？」

葵ちゃんと薫ちゃん、ナオミさんも参加でずっしりと寄りかかってしまった。

それでも支えてくれる気がするんだから、良いわよね、横島さん？
なにしろ、美女美少女の味方なんだから。

第十話 傾国傾城？（後書き）

なんだか本気で幼女天国展開してますW

第十一話 GM来週? (前書き)

ゆりっち来るかと思いきや・・・W

第十一話 GM来週？

少年 T・Y

実績つうのは恐ろしい話で。

先日の種子島を使った怪異追放ミッションは、海外でも注目を浴びてしまったらしい。

まあ、実際は危険物や地上処理が不能なものを地球脱出速度に乗せちまおうという実験だということで説明して、さらに封印に参加した人員やら作戦内容を闇に捨て去ることで状況を補強した、らしい。

が、この緊急対応能力の高さは、右肩下がりの宇宙産業では好評で、予定外ミッションやら資材補給ミッションなんかで大いに期待されることになってしまった。

BABELだけではなく、世界中のエスパーの力を合わせれば、24時間以内に国際宇宙ステーションにペプシを届けることが可能なのだ。

つうか、そのネタでCMとらせてくれて、世界各地から依頼がきたもんなあ。

村枝のおやじからも「CM」とらせろ！ とメールが来るけど、そのたびにタマモの御ネム写真やら歯磨き写真を送ると鎮静化した。そんなことを何度か繰り返すうちに、いつのまにやらお袋からのメールが入ってきた。

『忠夫、タマモちゃんを妹にしなさい』

すでに養子縁組の書類が完備状態でコピーで送られてきたのを見て、もう決定なんか、と苦笑いしてしまった。

まあ、タマモみたいな可愛い幼児を放置なんかできるはずもない両親だし良いんだけどな。

が、

その事務処理にお袋が来日すると聞きつけたうちのチームの娘っこたちは異常に盛り上がっていた。

「よ、よ、よ、よこしま！ し、し、したぎはこれのほうがいいかなっ、なっ！」

「大人パンツはやめとけ、薫」

「横島はん！ うちらとのつきあいちゃんと説明してくれてはるんやろな！？」 突然嫁いびりとかいややで！」

「おちつけ、葵」

「うふふ、私たちの子供なのに妹って、ちょっと悔しいわ」

「ありもしない妄想はやめとけ、シホ」

「横島さん、あの、私もご挨拶して良いですか？」

「あたりまえや、ナオミちゃん」

「・・・えーっと、私も？」

「おお、ええで、愛子」

てな会話が一日何度も繰り返されるのはつらすぎや。

少女 S・S

正直、一週間も暴走しまくってしまったわ。

だって、大好きな人の義母様よ？
いずれ、私たちの母親にもなる人ですもの。
よく思われないに決まってるじゃない？

「うつわぁ・・・シホちゃん、本気？」

ちょっと引き気味のナオミさん。

「そうやね、最低でもうちら三人は娶ってもらわんと」

「うへへ、美少女三人の詰め合わせだぜ？ 横島だって正直になれ
ばいいんだよ」

「・・・さすがに、今の段階で正直になったら、後ろ手が回ると思
うわよ？」

愛子さんも苦笑い。

「でもなあ、アタシらをこれだけ普通にくれる奴らって、横島
ぐらいだと思うぜ？」

「せやね」

薫ちゃんの意見は当たってるけど、それがすべてじゃない。

私たちが横島さんから離れたくないだけなんだと思う。

能力とかそういうものじゃない。

横島さんのそばにしていると感じる安心感、暖かな空気、あれを覚え
てしまえば二度と離れられない。

だから、なんとしてでも逃がさない。

ねつ造でも何でも良いから。

彼を逃さない。

「ふふふふふ」

「お、シホ、頼もしい黒い笑いだな」

「頼んだで、ハラグロ！」

「・・・なんでかしら、プランが一人用で進んでるわ」

「「ごめんごめん！」」

主婦 Y・Y

以前、美神事務所に勤めていたときも思ったけど、息子^{こしゅつ}はどうもニツチな女運らしい。

自称、振られ人生とか言っているけど、美神令子もあの氷室さんもベタボレだった。

で、今度はなんと政府機関へGS協会からの派遣ときたものだから驚きだ。

BABEL、いわゆる超能力管理機関だ。

その問題チームの指揮官として召集され、現在、きわめて良好に運用中というのだからどんな人間か、と調べてみると・・・。

思わず苦笑い。

小学生ぐらいの女の子三人と高校生ぐらいの女の子のチーム。

さすがにセクハラも控えているらしく、自ら監視役にクラスメイトを引き込んでいるというのも好感が持てる行動だった。

が、チームの女の子のうち、年少組が幼い頃から暴走気味的能力に振り回されていた関係で学校に行ったことがないそうだ。

それを「よし」としなかった息子は、上部機関やら関係省庁、さ

らには六道経由で財界まで手を伸ばして動いているのはやりすぎに
思えなくもない。

でも、ま、不細工に育ったとはいえ自慢の息子のやることだから、
ということで、私も旦那も陰ながら手を出すことにした。

そして、その計画がかなり進んだところで、今度は妖怪の女の子
を「超能力者」として保護して、BABELに入れてしまい、自分
の保護下に入れてしまった。

「どんだけ幼女好きなんだ？」と旦那が言うのも仕方ないだろう。
とはいえ、嫌らしい感情があるわけではなく、本当に娘のように
かわいがっている姿は、本当に親子だと思わせられた。

まあ、その愛らしい姿で周囲にアピールさせて、チームの女の子
たちの進学を計画しているのもたいしたものだけど。

そのへんの意識調査もかねて、さーって、ひっかき回しに行きま
すか！

「百合子、タマモの生写真を！」

・・・あー、はいはい。

とりあえず、忠夫に最新写真を送らせるから、仕事がんばんな。

「うおおおおお！ あと10年は戦える！！」

第十一話 GM来週? (後書き)

かるーくよめる作品をコンセプトにしてるので、出来が浅いですが、
お楽しみいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3225x/>

よこしるどれん

2011年11月3日18時11分発行